



自閉症スペクトラムにおける自伝的記憶についての  
臨床心理学的一試論：東田直樹の体験記述分析

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-04-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 川部, 哲也 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/00005309">https://doi.org/10.24729/00005309</a>

# 自閉症スペクトラムにおける自伝的記憶についての臨床心理学的一試論

—東田直樹の体験記述分析—

川部哲也

## 1. 問題

### (1) 自閉症スペクトラムを当事者の視点から理解する必要性

近年、心理臨床において成人の自閉症スペクトラム（以下ASDと略記）の人に会うことが多くなってきた。精神科医や心理療法家の多くもそのような実感を持っていると思われる。精神科医である広沢は、学生相談室での経験から次のように述べている。「現在、学生相談室をはじめとする青年期の臨床現場でASD(PDD)という概念はもっともホットな話題となっている（広沢, 2015, p126)」。なぜASDがホットな話題なのか。その理由は「従来の心理学や精神医学の概念や理論の前提は、そのままでは通用しないことが多い。実際に彼らにとって、自己の再構築を促すような精神療法は重く感じられ、それを促す治療者の姿勢には違和感を覚えるようなのである（広沢, 2015, p3)」。河合（2010）は発達障害（筆者注:ここで使われている「発達障害」という用語は、心理療法を考えるための有用性ゆえに、ASDに加えてADHDも含めており、広い概念となっているが、中心概念としてはASDが想定されている）の中核的特徴として「主体のなさ」を挙げている。そのため、従来の伝統的な心理療法を行うことが難しくなっていると述べる。「発達障害において、主体がはっきりしないことが問題であるのに、心理療法は主体を前提としている。そもそも心理療法は、医学モデルのように異常が認められた人に適用されるのではなく、クライアント本人が自分に悩みや問題を感じて、それを解決するために主体的に心理療法を受けようという人を対象にしている。（中略）つまり19世紀末に西洋で成立した心理療法は、個人として自立していて、自分で自分を見つめるという自己反省のできる近代主体を前提としているのである。主体のはっきりしていない発達障害の人からすると、自主的に自分のことを話し、自分で決めていくというのは非常に困難なことであろう（河合, 2013, pp8-9)」。

このように従来の理論が通用せず、「主体がない」と言われている人は、どのような世界を生きているのだろうか。そのような問題意識の下、これまでにASDの人の体験世界を内面から明らかにしようとする試みがなされてきている。ASD当事者の体験記は近年多く

出版されている。テンブル・グランディン（Grandin,T.）の『我、自閉症に生まれて（Emergence：Labeled Autistic）』やドナ・ウィリアムズ（Williams,D.）の『自閉症だったわたしへ（Nobody Nowhere）』は今や古典となり、日本では森口奈緒美、藤家寛子、ニキ・リンコ、綾屋紗月がASDの人の主観的な体験世界を具体的かつ鮮やかに示してくれている。特徴的であるのは女性の著者が多いことである。ASDにおいては女性のほうが社会的に言語を操ることに長けているようである（一方で、Fitzgerald（2004/2008）が挙げたアスペルガー症候群の「天才」は6名とも男性であることと対照的である。男性は数学や芸術など、女性とは異なる領域で能力を開花させる傾向があるのかもしれない）。

### (2) 自閉症スペクトラムにおける記憶の問題の扱われ方

さて、本論はASDの体験世界を描く試みのひとつであるが、2つのオリジナリティを加えたい。ひとつは、「自伝的記憶」を切り口として論じることである。ASDについて論じる際に、Wing（1996/1998）が提唱した「障がいの3つ組（社会的相互交渉の障がい、コミュニケーションの障がい、想像力の障がい）」や、DSM-5において導入された身体感覚の特異性についてはしばしば扱われてきたものの、記憶の問題、特にASDの人におけるエピソード記憶、特に自己に関連したエピソード記憶である自伝的記憶についてはほとんど論じられていないのが現状である。ASDの人の記憶研究について山本ら（2016）はレビューを行い、ASDの人のエピソード記憶は、符号化の段階で出来事を感情や自己と関連付けることが不得手であることを指摘しており、自伝的記憶に弱さを持っていることが示唆されている。その一方で、ASDの人の「機械的記憶」についてはしばしば言及されている。

Kanner（1943/1978）の症例ドナルドは、1歳で多くの曲を正確に歌うことができ、2歳で「顔と名前に関する並外れの記憶力」を持ち、町の名前をたくさん知っていた。そして「詩篇の第23篇と長老教会の問答集の23の問答さえ覚えた」。Asperger（1944/2000）の症例フリッツは6歳にして6数の復唱が楽にできた（この課題は10歳の課題であった）。他にも「1年中の聖

名祝日を知っている「カレンダー人間」(養護)学校に上がる前にウィーンの鉄道の発着駅をすっかり覚えていた者、その他の機械的記憶の保持者がいる」と述べられている。このように、機械的記憶の優秀さは自閉症研究の最初期から指摘されていた。

それ以来「自閉症の機械的な記憶能力に関しては、自閉症の特徴の1つとして必ず記載されてきたが、特殊能力として取り上げられることが多」かった(杉山, 2011)。特殊能力という意味づけがある一方で、Frith (1989/1991) は「機械的な記憶力の良さは、より以上に良好な意味的記憶力に伴うのが普通です。この点から、自閉症児の機械的記憶力の驚くべき良さは、完全無欠な能力の孤島というより、むしろ機能不全の徴候と見た方が当を得ています」と述べ、機械的記憶は優秀であるが意味的記憶は貧弱であり、それは機能不全の徴候であると否定的に意味づけられている。確かにその記述に合致するASD者は多いであろう。例えば、いくら多くの駅名や野球選手の成績、円周率の数字を記憶していたとしても、それに見合う他の社会的能力が優秀でないならばそれは「機能不全」というレッテルを貼られてしまうのである。そのような観点は半ば「ASD者の常識」として現代にも持ち込まれているといえる。しかし、ASDの人の記憶を単なる「機能不全」としてしまっただけの良ののだろうか。筆者にはそれはASDに対してあまりに一面的であり、「定型発達者の視点」でしか見ていないように思われる。

「定型発達者の視点」について、例を挙げてみよう。例えば「想像力の障がい」について。これは物事が同じ状態であることを好み、その秩序が崩されるとパニックを起こすという「こだわりの強さ」のことを指し、同一性保持(同一態維持)と呼ばれているものである。想像力の乏しさゆえ、物事が同じであることへのこだわりが強くなるという仮説である。ところで、ニキ・リンコ(2007)は自身の子どもの時代のエピソードとして、電柱に登っている作業員を見てギャング団だと思ってしまい、交番に通報しに行ったことを紹介し、このようなことが起こるのは「人が電柱に登るには、いろいろな理由がある」ということに想像が及ばず、自分の考え以外の他の案に変更することができないという意味で、想像力が弱いと説明している。確かに狭くて融通がきかない想像力であるがゆえに想像力の不調には違いないが、障がいという言葉から連想される「想像力の異常さ、貧困さ」とは異なり、その人なりの生き生きとした豊かさを有していると考えられる。つまり、定型発達者から見れば「障がい」であるものが、ASDの当事者から見れば「障がい」よりも「モ

ンダイな想像力(ニキ・リンコ, 2007)」と呼ぶべき、独自の想像力が成立しているのである。このように、定型発達者の視点とASDの人の視点とははっきりと異なる。いわば異文化であると考えられる。

記憶の問題にも、このような食い違いが起こっているのではないだろうか。すなわち、「記憶の機能不全」に見えるものは、ASDの当事者の体験から見ると、どのような事態であるかを見定める必要があるのではなからうか。ASDの体験世界を理解するためには、定型発達者の視点を一旦棚上げにして、ASDの人の体験語りに耳をすます必要があると思われる。

### (3) 男性の体験記述を扱う意義

もうひとつのオリジナリティは、男性が描くASDの体験世界を参照することである。これまでにASDの体験世界を描いた優れた論考(村上, 2008; 内海, 2015)は女性当事者の体験記述を多く参照しており、男性当事者の例に乏しい。ASDの体験世界を包括的に見ようとするならば、男性による記述をも参照することが有効であると考えられる。本稿で取り上げるのは、男性の自閉症者である東田直樹の体験記述である。彼は言葉を口から発することは難しいが、パソコンや文字盤等を使用して自分の思考や気持ちを言葉にすることができ、非常に貴重な記録を著し続けている。本論では彼の体験を主軸として考察する。

## 2. 目的

自伝的記憶のあり方に着目することにより、ASDの人の主観的体験世界を理解することが本論の目的である。これまであまり扱われてこなかった男性自閉症者による自伝的記憶についての体験記述を参照し、ASDの人の体験する世界のあり方の一端を明らかにすることが狙いである。

## 3. 東田直樹の「記憶」についての分析

ここで扱うテキストは、東田直樹が13歳の時に書いた『自閉症の僕が跳びはねる理由』(2007年)と、16歳の時に書いた『自閉症の僕が跳びはねる理由2』(2010年)である(以下、2つのテキストを『理由1』『理由2』と略記)。両者を読み比べると『理由1』には「記憶」についてのトピックが何度も登場するが『理由2』では減少し、その代わりに身の回りの他者への思いが多く綴られている。東田の関心は13歳で自身の認知機能に、そして16歳で周囲の人間へと向けられている。定型発達の様相と比較しても、この関心の推移は見事であり、13歳にして自分が持つ認知機能を経験

的に内省する作業を行っていたことは特筆すべきであろう。自閉症の特徴として村上（2008）は、自閉症の人には「視線触発」が起こらないことを指摘している。内海（2015）の言葉を借りると「他者からこちらに向かってくる志向性に触発されないこと」すなわち、他者のまなざしに反応せず、したがって、他者からまなざされる＜私＞も成立しない事態である。そのような超越論的自我が未成立であることは、自分のあり方について考えてみるという内省の構造を立ち上げることが相当に難しいと考えられるのだが、その不利な条件であるにもかかわらず東田は自分の経験を対象化し、ことばにすることに成功していると思われる。彼が並外れた感性を持っていることが窺える。

ではここから「記憶」についての検討に入る。テキストから筆者が抽出したポイントは5つである。順に論じていくこととする。

#### (1) 「点」の記憶

僕は、いつも同じことを聞いてしまいます。／「今日は何曜日？」とか「明日は学校ありません」など、分かりきっていることを何度も聞いてしまいます。分からないのではなく、分かっているのに聞いてしまうのです。／どうしてかと言うと、聞いたことをすぐに忘れてしまうからです。今言われたことも、ずっと前に聞いたことも、僕の頭の中の記憶としては、そんなに変わりはありません。／物事が分かっているわけではありません。記憶の仕方が、みんなとは違うのです。／よくは分かりませんが、みんなの記憶は、たぶん線のように続いています。けれども、僕の記憶は点の集まりで、僕はいつもその点を拾い集めながら、記憶をたどっているのです。（『理由1』pp18-19）

ここで東田は自分の記憶を「点の集まり」と表現している。人から言われたことをストーリー（＝線）として記憶するのではないことが窺える。では「点」として記憶されているとはどのような事態なのだろうか。上記の例から考えてみる。

まず、すぐに消えてしまうという特徴がある。線の記憶であれば、手繰り寄せすることも容易であろうが、点の記憶は拾い集めなくてはならない。いわゆるワーキングメモリが弱いという言い方ができるだろう。しかし、全てを忘却しているわけではない。彼の記憶には「今日は○曜日ですよ」と言われた場面の記憶は保持されている。ただし、彼の記憶は「今言われたことも、ずっと前に聞いたことも」同じであるという。すなわち「時間」という要素が関連付けられていないという特徴がある。このことは、ASDの人の機械的記

憶が優れていることと符合する。Kannerの症例ドナルドのような優れた機械的記憶は、対象が「点」の記憶であるときに限り優秀なのである。Garland(1997/2000)や藤家（2004）のように、丸暗記は得意であるというASDの人は多いことにも関連していると考えられる。複雑な要素のないもの（数字、マークなど）は「点」として記憶可能なため、記憶することが容易であると考えられる。

#### (2) 場面の映像としての記憶

僕らはよくオウム返しをします。質問されたことに対して答えるのではなく、質問と同じ言葉を繰り返すのです。（中略）僕らは質問を繰り返すことによって、相手の言っていることを、場面として思い起こそうとするのです。言われたことは意味としては理解しているのですが、場面として頭に浮かばないと答えられません。（『理由1』p20）

ここでいう「オウム返し」はいわゆるエコラリア（反響言語）と呼ばれる現象である。内海（2015）によると、ASDの四分の三の事例でみられると言われている。「エコラリアは自閉症児の示す病的な現象とされているが、彼らが彼なりにことばを学ぶ、その端緒でもある（内海，2015）」。ASDの人はあたかも外国語を学ぶかのように言葉を習得する。（定型発達の人であっても、まったく知らない言語の国で話しかけられたならば、まずオウム返しが生じるのではないかと思われる。ゆえに、エコラリア自体は決して病的とはいえない。）しかし、東田のエコラリアはこのような「言語習得の端緒」としてではなく、「場面」の記憶を想起するための手段であると語ってくれている。前述の(1)とも関連するが、ASDの人にとっての記憶は「点」であり、「場面」の記憶が頼りである。すなわち、具体的な場面の映像を想起することが、彼にとっての記憶の基礎をなしていると考えられる。Grandin(1995/1997)の言う「思考が映像化される」ことや、ニキ・リンコ（2005）が言う、記憶には何枚もの画像が収められていると語っていることも、同様の事態を示しているといえよう。

映像としての記憶について、筆者が思い出すことがある。数年前に筆者は、においをきっかけに記憶が想起されるというブルースト現象について面接調査を行っていたところ、ある調査協力者が、香水のにおいを契機として、ワンピースの上半分だけが映像として浮かんだという体験を語ってくれた（川部，2013）。そこに喜怒哀楽などの感情は伴っておらず、まるで1枚の絵画のようなものとして想起された断片的な記憶

であったため、「感情付与以前の、一つの映像でしかない記憶」と命名し考察を行った。ストーリーはなく、その場面の前後の記憶もない。そこだけ切り取られた一場面の映像記憶であることから、今思うと、この記憶は東田のいう「点」の記憶であり、かつ映像的な記憶といえるだろう。また、嗅覚という原始的器官感覚による記憶想起であることから、これは記憶の原初的形態とも言うべき現象であると推察される。ゆえにASDの人の映像記憶は、発達早期には誰もが持っていた、言語獲得以前の原初的なあり方ではないかと考えられる。東田も自らの感覚について述べている箇所がある。水の中にいるのが好きという話の流れで、生物が陸に上がる以前の生命について思いを馳せている。そして「僕たちは原始の感覚を残したまま生まれた人間（『理由1』p92）」であると語る。身体感覚、記憶のいずれもASDの体験世界は、病的あるいは異常というカテゴリーよりも、原始の感覚と呼ぶほうが適切ではないかと考えさせられる。

### (3) 無時間的な記憶

場面としての時間しか記憶に残らない僕たちには、1秒も24時間も、あまり違いはありません。（『理由1』p84）

(1)においても確認したが、彼の記憶には「時間」が関連づけられていない。また「過去の出来事については、昨日のことも1年前のことも、僕の中ではあまり変わりがありません（『理由2』p111）」とも述べられており、定型発達の人「過去」のあり方とはずいぶん異なっている。このことは記憶が時間経過による影響（例えば、昔の記憶ほど薄れたり、印象が弱くなったりすること）を被らないということであり、ASDの人の記憶が、いわばタイムカプセルのように保存されていることを示している。ASDの人が時に優秀な長期記憶を保持しているのはこのゆえであろう。

また、ASDの人のフラッシュバックについて考える際にも、時間の体験の仕方の違いが関連している。

いつ、どこで、だれと何をしたということは、その時のことは覚えているのですが、全部がバラバラでつながらないのです。／僕たちが困っているのは、このバラバラの記憶が、ついさっき起こったことのように、頭の中で再現されることです。再現されると、突然の嵐のように、その時の気持ちが思い出されます。これがフラッシュバックです。（『理由1』p51）

このように、彼にとっては昨日と1年前が同じであるだけでなく、時として現在と過去も同じであることが描かれている。過去のことであるにもかかわらず、

あたかも現在起こっているように体験される。これはまさにフラッシュバックであるが、村上（2008）は定型発達者のフラッシュバックと自閉症者のそれは異なると述べている。「定型発達者のフラッシュバックはトラウマによるものだが、自閉症者の場合は些細な出来事でも反復される。定型発達の場合は、言語的な意味づけ作用が効かなくなるようなショックな体験でのみフラッシュバックが起きる。それに対し、そもそも言語的記憶の関与が弱い自閉症者の場合は、トラウマに限らず感性的な連合で、過去の映像が回帰する（村上、2008）」。杉山（2011）は自閉症に見られる特異な記憶想起現象として「突然に、時として数年以上前の出来事を思い出し、その想起した内容を、あたかもそれをつい先程のことのように対応する」現象を取り上げ、「タイムスリップ現象」と命名している。定型発達の人と異なり、ASDの人は過去と現在の区別が消失するところが特徴的であることを表現した用語といえるだろう。また、「タイムスリップ現象」の臨床特徴として、「その記憶体験は、普通児において一般に想起することができない年齢のものまで含まれ、また、患者の言語開始前後の年齢まで遡ることがある（杉山、2011）」という。(2)で述べた筆者の「記憶の原初的形態」仮説を支持する知見であるといえよう。

そして東田の体験記述にも、トラウマに因らないフラッシュバックと考えられる体験がある。「ひとりで大騒ぎしたりすることがあります。（中略）色々な場面が突然頭の中にひらめくのです。それは、自分にとって、とても楽しい思い出だったり、本の中の1ページだったりします（『理由1』p50)」。この場合は楽しい過去の一場面の映像が現前し、その体験に浸っている。そこには永遠の現在と呼ぶべき幸福な時間がある。

### (4) 居場所としての記憶

コマーシャルをよく覚えているのは、繰り返し見ているからだし、コマーシャルが流れるとテレビの前にとんでいくのは、自分の知っているものが映っているのが嬉しいからです。（中略）あんなに何度も繰り返し見せられると、まるで友達が遊びに来てくれたような感覚になりませんか？（『理由1』p93）

東田は「コマーシャルは好きではありません（『理由1』p93）」と述べているが、繰り返しはとても楽しいとも述べている。すなわち、彼にとって、既に知っているものが現れることはとても楽しく、安心することである。ASDの人にとって、先が見通せないことは恐怖を呼び起こす。日常生活はいつも予測不能なこ

とに満ちているため、ASDの人は常におそるおそる生きていてもいえるだろう。そのような不安な中にあって、安心できるのが既に知っているものを繰り返し体験することである。東田は決まった言葉のやりとり（例えば、東田「スパゲッティ」相手「スパゲッティじゃないよ、焼きそば」という、決まった返事が楽しい。『理由2』p18）をすることで安心を得ている。このように、記憶にあるものが繰り返されることは、ASDの人にとって「居場所」のように機能していると考えられる。ただそれは、定型発達の人のように、自分で行こうとして行ける居場所ではない。

自閉症の人が繰り返しを好きなのは、自分のやっていることが好きだとか、楽しいからではないのです。／まるで、何かにとりつかれたかのような態度に驚く人もいます。すごく好きでも、普通あんなに繰り返せるものではありません。僕は繰り返すことを、自分の意志でやっているわけではないのです。／たぶん、脳がそう命令するのです。／それをやっている間は、とても気持ち良く、すごく安心できます。（『理由1』p122）

繰り返しを「自分の意志でやっているわけではない」というのは重要な指摘である。東田はまた、してはいけないと理解していても繰り返してしまう（『理由1』p124）とも述べており、自分の意志とは関係なく、繰り返しの快に自動的に向かってしまうあり方を描き出している。繰り返しの快は確かに安心を与えてくれるのであるが、本人が望んでそうなっているのではないこと、時には自分の意志に反してそうなるので自己評価が下がってしまう可能性もあると考えられる。これを本人の望むものにするには、この「居場所」にいかにして自分の意志で行けるようになるかがひとつの指標となるだろう。繰り返しの快に自分を乗っ取られてしまうのではなく、自分がこの繰り返しを望み、それを行っているのだという意識のあり方にシフトしていけるようになることがASDの人の心理療法の目標のひとつとなるだろう。（ASDの繰り返しの快は、定型発達者における嗜癖と同じであるか異なるか、あるいはFreudの反復強迫との関連の有無については、今の筆者には論じる材料がないため、稿を改めていずれ論じたい。）

#### (5) 記憶の受動性

（電車の時刻表やカレンダーをどうして覚えるのですか？という問いに対し）それは楽しいからです。（中略）時刻表やカレンダーはだれが見ても同じだし、決まったルールの中で表されているのが分かりやすいの

です。／好きなことは、まるで向こうから僕の頭の中に入り込んでくるような感じで記憶できます。（『理由1』p100）

東田にとって記憶は入り込んでくるものであり、自分の意志で覚えるのではない。KannerやAspergerの症例にもあるように、自分の脳にピタリと相性が合えば、膨大な量の記憶が可能になると思われる。これは非常に優れた能力であるといえるが、これまでの考察からすると、当事者にとっては楽しいというよりも、自らの意志に関係なく「安心できる居場所」に居続けている状態、いわば「安心できる密室」に閉じこもっている状態ともいえるため、一概に善し悪しを論じるのは難しい。

ところで、この膨大な記憶は、単なる「機械的記憶」なのであろうか？筆者にはそうは思えないところがある。記憶している本人にとっては、数字は単なる数字ではないからである。小川洋子（2003/2005）による小説『博士の愛した数式』に登場する博士が数の世界の面白さ、美しさを教えてくれているように、その世界の内側にいる人間にとっては、決して単なる機械的記憶ではない。その豊かさが周囲にはわかりにくいがゆえに、自分の世界に閉じこもっている（自閉）という印象を持たれることになるのだろう。

#### 4. まとめ

東田直樹の体験記述から、記憶のあり方について以下の5つのポイントを抽出した。

1. 「点」の記憶
2. 場面の映像としての記憶
3. 無時間的な記憶
4. 居場所としての記憶
5. 記憶の受動性

この5つからは、定型発達の人々の記憶とは質的に異なる点が多いことが示されたといえよう。また、東田の体験はASDの人の体験記述とも多く重なり合うことから、ASDの人の記憶の特徴と考えてもよいだろう。ただし、これらはASDの人の記憶の特徴であると同時に、言語獲得以前の原初的な記憶のあり方を示している可能性がある。そう考えると、これらの特徴はASDだけのものではなく、人が誰でも昔持っていた記憶の様式の名残であるともいえるのである。ASDはスペクトラム（連続体）である。ASDの人の体験世界の一部は誰もが持っているものである。ゆえに、ASDの人に関わる際にまず大切なことは、関わる者自身が、自分の内にある原初的な感覚世界に開かれていることであろう。そこに、定型発達者の視点に拠ら

ない共感が生じる可能性があると考えられる。

最後に、残された課題を挙げておく。

- 1) ASDの人における時間の問題
- 2) ASDの心理療法論
- 3) 機械的記憶の豊かさという可能性の模索の3つである。

1) については、本稿ではASDの記憶の特徴として「無時間的な記憶」を挙げたが、Grandin (1995/1997)によると、自らの記憶は映像として「ビデオ・ライブラリー」に保存されており、おおむね正確に時間順になっているという。すなわち、Grandinの場合は記憶に「時間」の要素を付けることに成功している。このようにASDの人の中にも、自分の記憶は「無時間的な記憶」ではないという人もいるかもしれない。しかし、筆者の考えでは、これは定型発達の人々の時間感覚とは明らかに異なると考えられる。Grandinは「ビデオ・ライブラリー」という視覚イメージを用いることにより、「時間」という抽象概念さえも具体的な画像に変換するという技術を用いている可能性がある。このように、ASDの人は本来認識が苦手な事象を、視覚イメージに変換することにより得意領域に持ち込むことができるといえよう。同様の例として、ワーキングメモリの弱さを持つはずのASDの人がWAISなどの数唱課題において非常に高い評価点を得る場合がある。これも同様に、数字を視覚イメージに変換することによって、課題をこなしている可能性がある（ちなみに珠算経験者にとっては、数字を視覚イメージに変換するのはきわめて容易である）。このことは心理検査を実施する際に留意しておくべきであろう。

2) に挙げたASDの自伝的記憶のあり方を踏まえると、どのような心理療法が可能になるのかというASDの心理療法論については、本稿の知見からは、記憶にいかに関与をもち、実感を伴った自己感覚をいかに記憶の映像とつなげていくかということ、「居場所」となる繰り返しの快に対して、いかに能動的になりうるのかということに、注力することが重要になるかと思われる。本稿では十分に論を展開するスペースがないため、この点については稿を改めてじっくり検討したい。

3) については、機械的記憶を人はどのように体験しているのかを検討する必要がある。前述したように、『博士の愛した数式』の博士を例に、機械的記憶が持つ豊かさを筆者は指摘してみたが、まだ仮説の域を出ない。多くの例をあたり、記憶を質的に調査する必要がある。また、ASDだけが優れた機械的記憶を有しているわけではないため、定型発達の人を含め今

後広く調査を行う予定である。

## 付記

本研究は、科研費（課題番号16K13489）の助成を受けました。

## 文献

- Asperger, H. (1944). Die 'autistischen Psychopathen' im Kindesalter. *Archiv für Psychiatrie und Nervenkrankheiten*, 117, 76-136. 高木隆郎（訳）(2000). 小児期の自閉性精神病質. 自閉症と発達障害研究の進歩, 4, 30-68.
- Fitzgerald, M. (2004). *Autism and creativity*. 石坂好樹・花島綾子・太田多紀（訳）(2008). アスペルガー症候群の天才たち. 星和書店.
- Frith, U. (1989). *Autism: explaining the enigma*. 富田真紀・清水康夫（訳）(1991). 自閉症の謎を解き明かす. 東京書籍.
- 藤家寛子 (2004). 他の誰かになりたかった—多重人格から目覚めた自閉の少女の手記. 花風社.
- Garland, G. (1997). *A real person*. ニキ・リンコ（訳）(2000). ずっと「普通」になりたかった. 花風社.
- Grandin, T. (1995). *Thinking in pictures*. カニングハム久子（訳）(1997). 自閉症の才能開発. 学習研究社.
- 東田直樹 (2007/2016). 自閉症の僕が跳びはねる理由. 角川文庫.
- 東田直樹 (2010/2016). 自閉症の僕が跳びはねる理由2. 角川文庫.
- 広沢正孝 (2015). 学生相談室からみた「こころの構造」. 岩崎学術出版社.
- Kanner, L. (1943). Autistic disturbances of affective contact. *Nervous Child*, 2, 217-250. 十亀史郎・斎藤聡明・岩本憲（訳）(1978). 情動的交流の自閉の障害. 幼児自閉症の研究, 10-55, 黎明書房.
- 川部哲也 (2013). 半構造化面接法によるブルースト現象の特徴の検討. 大阪府立大学大学院人間社会学研究科心理臨床センター紀要, 6, 53-60.
- 河合俊雄 (2013). 大人の発達障害における分離と発生の心理療法. 河合俊雄・田中康裕（編）大人の発達障害の見立てと心理療法. 創元社. pp4-20.
- 村上靖彦 (2008). 自閉症の現象学. 勁草書房.
- ニキ・リンコ (2005). 俺ルール！自閉は急に止まらない. 花風社.
- ニキ・リンコ (2007). 自閉っ子におけるモンダイな想像力. 花風社.
- 小川洋子 (2003/2005). 博士の愛した数式. 新潮文庫.

- 杉山登志郎 (2011). 杉山登志郎著作集1 自閉症の精神病理と治療. 日本評論社.
- 内海健 (2015). 自閉症スペクトラムの精神病理. 医学書院.
- Wing, L. (1996). *The autistic spectrum: a guide for parents and professionals*. 久保紘章・佐々木正美・清水康夫 (監訳) (1998). 自閉症スペクトル：親と専門家のためのガイドブック. 東京書籍.
- 山本健太・増本康平 (2016). 自閉症スペクトラム障害者のエピソード記憶. 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 9, 45-50.